

青少年の野外教育の継続による日常生活への影響の分析

白木 賢信
(常葉大学)

【要旨】

本論文では、青少年の野外教育の継続による日常生活への影響について、青少年教育施設における受入事業の事例分析を行った。分析の結果、事業の宿泊の有無によって「事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容」と「繰り返し事業に参加することによって予想される変容」に違いが生じることが判明した。この結果より、宿泊なし（日帰り）事業では、継続参加により特に自分自身についての認識の拡大にかかわる日常生活の変容が期待されているのに対し、宿泊あり事業では、継続参加により特に自然や他人に対する認識の改善にかかわる日常生活の変容が期待されていることが推測される。これは、野外教育の成果としての日常生活への影響には2面性があることを示唆しており、青少年の野外教育の継続による日常生活への影響の特徴の1つであると考えられる。

1. 目的

本論文は、青少年の野外教育の継続による日常生活への影響についての分析結果を提示しようとするものである。

これまで、日常生活への影響からみた青少年の野外教育の目的達成の特徴の一端を明らかにするための事例分析を行い、その結果、青少年の野外教育の目的達成度による日常生活の変容の有無はその目的の種類によることが判明した¹⁾。この作業は、非日常生活で行われる野外教育が青少年の日常生活にあってどのような意味を持つのかを解明するためのものであるが、このような野外教育を継続することによる日常生活への影響についての分析は未着手で、今後の課題の1つとして残されていた。

そこで今回は、上述の事例分析をさらに進め、青少年教育施設で行われる野外教育の継続による日常生活への影響についての分析結果を提示したい。

2. 研究方法

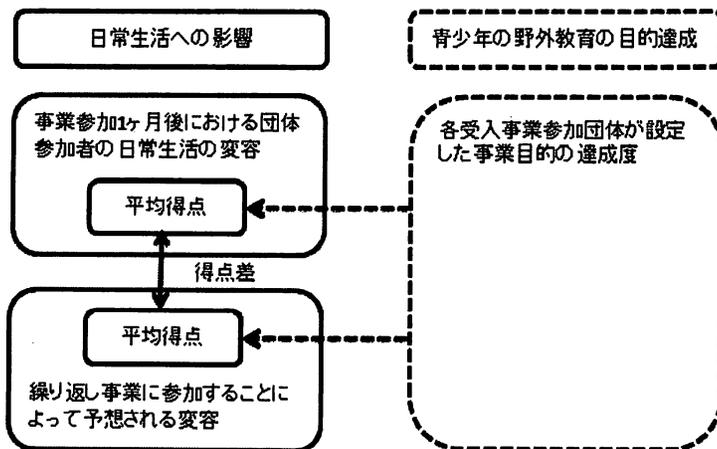
(1) 分析枠組の設定

上述の目的を達成するために図 1²⁾および図 2³⁾の枠組を設け、これを用いて、青少年の野外教育の継続による日常生活への影響に関する分析を行うことにした。

日常生活への影響について、これまでは青少年教育施設における受入事業に限定した上で「事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容」で捉えてきたが、今回はそれを分化させ、「繰り返し事業に参加することによって予想される変容」を加えて捉え

た枠組が図1である。

今回は「事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容」と「繰り返し事業に参加することによって予想される変容」の違いを探ることによって、青少年の野外教育を継続することによる日常生活への影響がどのような特徴を持っているかを分析してみることにするが、具体的にはそれぞれの変容を得点化した上で平均得点を算出し、両者の得点差を分析してみることにした。但し、両者の得点は各受入事業参加団体の担当者の回答データによるもので、特に「繰り返し事業に参加することによって予想される変容」は、今回はあくまでも予想で捉えており、追跡的な実態を捉えたものではない。



(注)実線箇所は本論文で取り上げる部分で、点線箇所は本論文では取り上げないが今後取り上げる必要があることを示している。

図1 青少年の野外教育の継続による日常生活への影響を捉える枠組

図2は、図1の「事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容」および「繰り返し事業に参加することによって予想される変容」を捉えるための枠組で、野外教育研究における野外教育を行うことによって期待される日常生活の変容の観点による⁴⁾。図中の①～⑧の項目はその具体的な項目である。

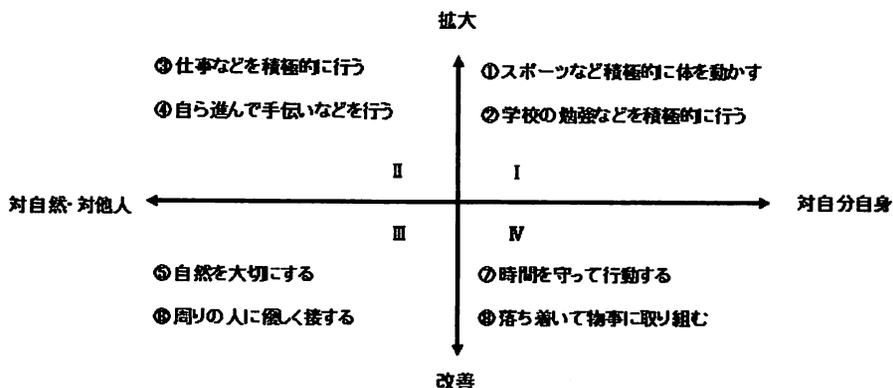


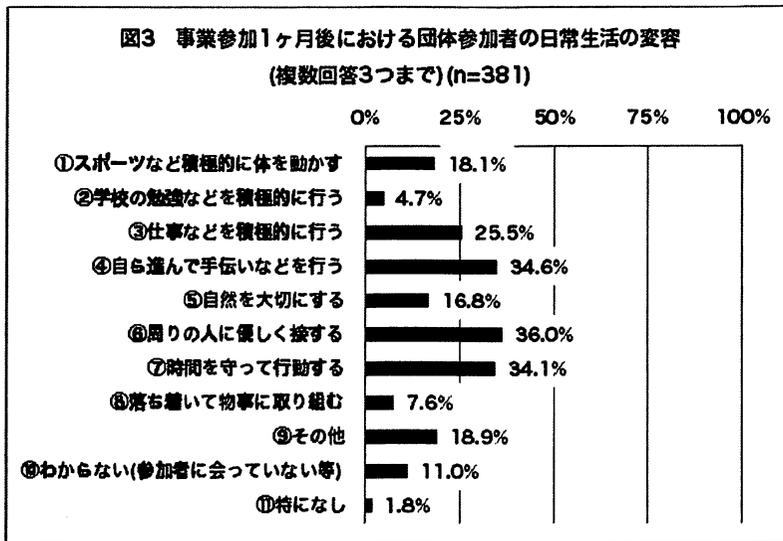
図2 青少年の野外教育による日常生活の変容を捉える枠組

(2) 分析データの収集

前述の分析にあたっては、青少年教育施設の 1 つである静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センター）の受入事業の事例分析を行うことにした⁵⁾。なお、本論文における調査データの使用については、センター所長の許可を得ている。

3. 研究結果と考察

まず基礎集計結果について、「事業参加 1 ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容」（以下「参加 1 ヶ月後の変容」）の結果は図 3 の通りである。それによると、「④自ら進んで手伝いなどを行う」「⑥周りの人に優しく接する」「⑦時間を守って行動する」は 30%を超えている。



「繰り返し事業に参加することによって予想される変容」（以下「継続参加による変容予想」）の結果は図 4 である。この結果を「参加 1 ヶ月後の変容」と比較してみると、①～⑧についてはそれぞれ「継続参加による変容予想」の比率の方が高くなっているのに対し、「⑨その他」「⑩わからない」「⑪特になし」については「継続参加による変容予想」の比率の方が低くなっている。上位 3 項目は「参加 1 ヶ月後の変容」と同じであるが、比率の順位に若干の違いが見られ、「参加 1 ヶ月後の変容」では⑥→④→⑦の順であるのに対し、「継続参加による変容予想」では④→⑦→⑥の順となっている。さらにこれら 3 項目について、同項目間における「参加 1 ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の比率差を見ると、「④自ら進んで手伝いなどを行う」では 20.0 ポイント、「⑥周りの人に優しく接する」では 11.5 ポイント、「⑦時間を守って行動する」では 16.0 ポイントの比率差となっており、④と⑦では 8.5 ポイントの比率差の違いが生じている。そこでここではこの比率差の違いに着目し、野外教育の継続による日常生活への影響の手がかりが得るべく、さらに分析を進めてみることにしよう。

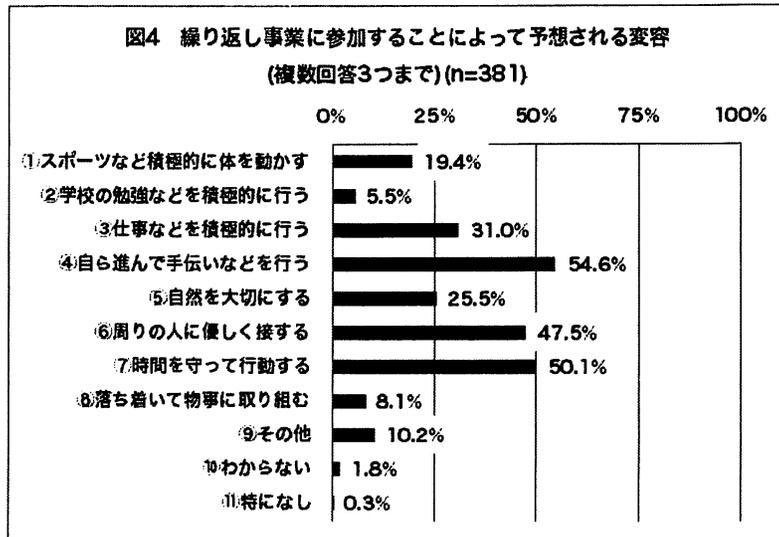


表1は、「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点および両者の得点差の結果である。なお、得点の算出にあたっては、サンプルごとに各項目について回答「あり」を1点、「なし」を0点とした。その結果、①～⑧の8項目はいずれも「継続参加による変容予想」の平均得点の方が高くなっており、特に③④⑤⑥⑦の5項目については得点差が統計的に有意となっている。一方、⑨～⑪の3項目はいずれも「参加1ヶ月後の変容」の平均得点の方が高く、統計的にも有意となっている⁹⁾。

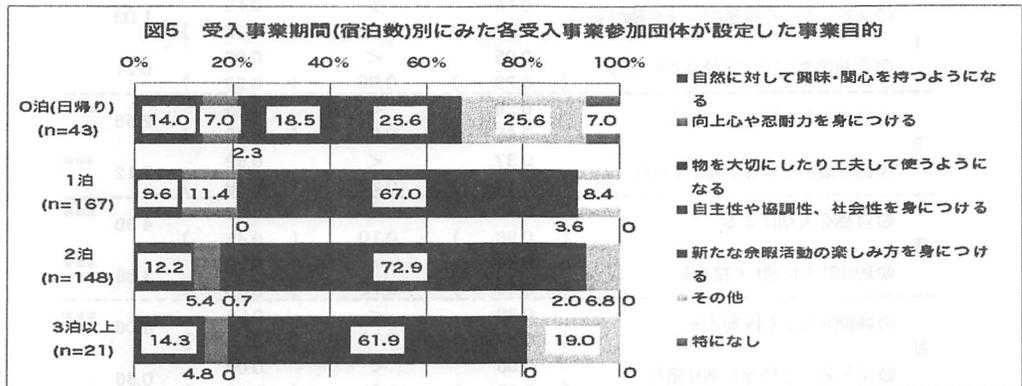
表1 参加1ヶ月後の変容と継続参加による変容予想の平均得点差—全サンプル (n=381) の場合—

日常生活の変容に関する項目	参加1ヶ月後の 変容平均得点 (標準偏差)	得点差	継続参加による 変容予想平均得点 (標準偏差)	t値
I ①スポーツなど積極的に体を動かす	0.18 (0.38)	<	0.20 (0.40)	1.00
②学校の勉強などを積極的に行う	0.05 (0.21)	<	0.06 (0.23)	0.60
II ③仕事などを積極的に行う	0.25 (0.44)	<	0.32 (0.47)	2.58 *
④自ら進んで手伝いなどを行う	0.35 (0.48)	<	0.56 (0.50)	7.45 ***
⑤自然を大切にす	0.17 (0.38)	<	0.26 (0.44)	4.42 ***
⑥周りの人に優しく接する	0.37 (0.48)	<	0.49 (0.50)	4.29 ***
⑦時間を守って行動する	0.34 (0.48)	<	0.51 (0.50)	6.69 ***
IV ⑧落ち着いて物事に取り組む	0.07 (0.26)	<	0.08 (0.28)	0.69
⑨その他	0.19 (0.39)	>	0.10 (0.31)	4.22 ***
⑩わからない	0.11 (0.31)	>	0.02 (0.14)	5.34 ***
⑪特になし	0.02 (0.14)	>	0.00 (0.05)	2.47 *

*p<.05 ***p<.001

表中の数値について、それぞれ小数第3位を四捨五入した。なお、⑩の「継続参加による変容予想平均得点」(数値)は、0.002—を四捨五入したため、0.00となっている。

以上が今回の調査対象（サンプル）すべてについての結果であるが、次に、宿泊の有無別に分析してみることにしよう。その理由は、青少年の野外教育の実施形態は多岐に渡るが、宿泊の有無がその実施形態を大別するものの1つであると考えられるからである⁷⁾。参考までに今回の事例では、0泊（日帰り）といった宿泊のない事業については、「新たな余暇活動の楽しみ方を身につける」と「その他」を事業目的とするサンプルの比率が最も高く、1泊、2泊、3泊以上の宿泊のある事業については、いずれも「自主性や協調性、社会性を身につける」を事業目的とするサンプルの比率が最も高い、という違いが見られる（図5参照）。



宿泊なしのサンプルの「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点差の分析結果は表2で、「参加1ヶ月後の変容」よりも「継続参加による変容予想」の方が統計的に有意に高いのは、①④⑦の3項目である。

表2 参加1ヶ月後の変容と継続参加による変容予想の平均得点差—宿泊なし(日帰り)のサンプル (n=41) の場合—

日常生活の変容に関する項目	参加1ヶ月後の 変容平均得点 (標準偏差)	得点差	継続参加による 変容予想平均得点 (標準偏差)	t値
I ①スポーツなど積極的に体を動かす	0.32 (0.47)	< 0.29	0.61 (0.49)	3.66 ***
②学校の勉強などを積極的に行う	0 (0)	< 0.05	0.05 (0.22)	1.43
II ③仕事などを積極的に行う	0.02 (0.16)	< 0.05	0.07 (0.26)	1.00
④自ら進んで手伝いなどを行う	0.15 (0.36)	< 0.15	0.29 (0.46)	2.22 *
III ⑤自然を大切にす	0.10 (0.30)	< 0.05	0.15 (0.36)	0.81
⑥周りの人に優しく接する	0.12 (0.33)	< 0.15	0.27 (0.45)	1.96
IV ⑦時間を守って行動する	0.10 (0.30)	< 0.20	0.29 (0.46)	2.72 ***
⑧落ち着いて物事に取り組む	0.05 (0.22)	< 0.05	0.10 (0.30)	1.00
⑨その他	0.22 (0.42)	= 0	0.22 (0.42)	0
⑩わからない	0.27 (0.45)	> 0.17	0.10 (0.30)	2.21 *
⑪特になし	0.10 (0.30)	> 0.07	0.02 (0.16)	1.78

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表中の数値について、それぞれ小数第3位を四捨五入したので、「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点差(数値)が必ずしも一致しない場合がある。

宿泊ありのサンプルの「参加 1 ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点差の分析結果は表 3 で、こちらは③④⑤⑥⑦の 5 項目で「継続参加による変容予想」の方が「参加 1 ヶ月後の変容」よりも有意に高い平均得点となっている。

表3 参加1ヶ月後の変容と継続参加による変容予想の平均得点差—宿泊ありのサンプル (n=329) の場合—

日常生活の変容に関する項目	参加1ヶ月後の 変容平均得点 (標準偏差)	得点差	継続参加による 変容予想平均得点 (標準偏差)	t値
I	①スポーツなど積極的に体を動かす (0.97)	> 0.16 0.02	0.15 (0.95)	1.09
	②学校の勉強などを積極的に行う (0.29)	< 0.05 0.00	0.06 (0.29)	0.21
II	③仕事などを積極的に行う (0.45)	< 0.28 0.07	0.95 (0.48)	2.55 *
	④自ら進んで手伝いなどを行う (0.48)	< 0.37 0.22	0.59 (0.49)	7.12 ***
III	⑤自然を大切に作る (0.98)	< 0.18 0.10	0.27 (0.45)	4.39 ***
	⑥周りの人に優しく接する (0.49)	< 0.40 0.12	0.52 (0.50)	3.89 ***
IV	⑦時間を守って行動する (0.49)	< 0.98 0.16	0.54 (0.50)	6.06 ***
	⑧落ち着いて物事に取り組む (0.27)	< 0.08 0.01	0.08 (0.27)	0.36
	⑨その他 (0.39)	> 0.18 0.09	0.09 (0.28)	4.46 ***
	⑩わからない (0.28)	> 0.09 0.08	0.01 (0.10)	4.91 ***
	⑪特にない (0.10)	> 0.01 0.07	0 (0)	1.74

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

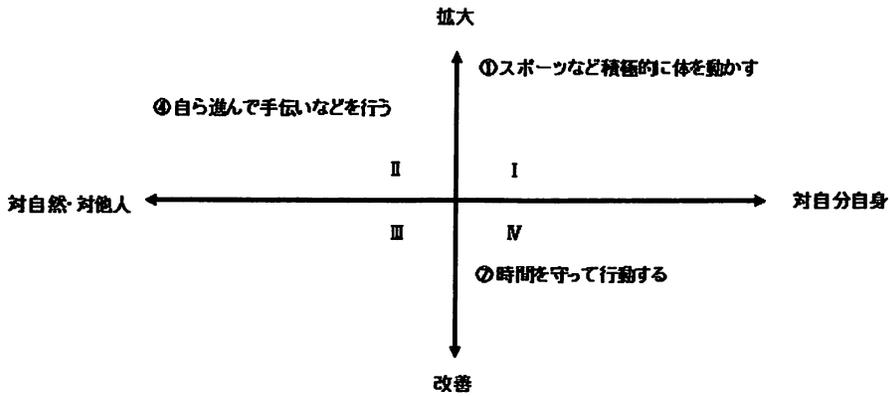
表中の数値について、それぞれ小数第3位を四捨五入したので、「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点差(数値)が必ずしも一致しない場合がある。

なお、②の「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点差(数値)は、0.003—を四捨五入したため、0.00となっている。

また、⑩の「参加1ヶ月後の変容平均得点」(数値)は0.075—、「継続参加による変容予想平均得点」(数値)は0.082—、両者の得点差(数値)は0.006—をそれぞれ四捨五入したものである。

以上の分析結果を図 2 の枠組を用いてまとめると、図 6 および図 7 の通りになる。それぞれの図中に記載されている項目は、「参加 1 ヶ月後の変容」よりも「継続参加による変容予想」の方が有意に高い平均得点の項目である。

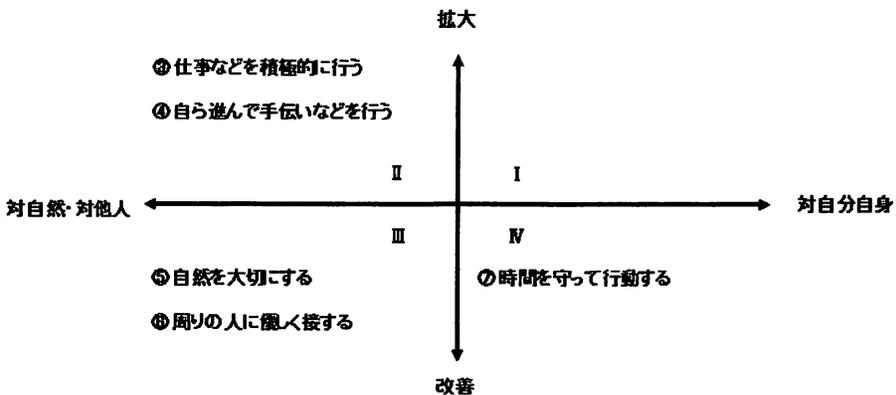
宿泊なしのサンプルの分析結果をまとめたものが図 6 である。これによると、第 I 象限、第 II 象限、第 IV 象限に 1 項目ずつ、「継続参加による変容予想」の方が「参加 1 ヶ月後の変容」よりも有意に高い平均得点となっており、特に、①は 0.1 % 水準で有意になっている(表 2 参照)。



図中に記載された日常生活の変容に関する項目
「継続参加による変容予想平均得点」のほうが「参加ヶ月後の変容平均得点」よりも高く、さらにその得点差が統計的に有意となっている。

図6 青少年の野外教育の継続による日常生活への影響の特徴－宿泊なしの場合－

宿泊ありのサンプルの分析結果のまとめは図7である。これによると、第II象限、第III象限、第IV象限で「継続参加による変容予想」の方が「参加1ヶ月後の変容」よりも平均得点が有意に高い項目があり、特に第II、第III象限にあっては、それぞれ2項目が入っている。特に、第III象限の⑤⑥はどちらも0.1%水準で有意となっている(表3参照)。



図中に記載された日常生活の変容に関する項目
「継続参加による変容予想平均得点」のほうが「参加ヶ月後の変容平均得点」よりも高く、さらにその得点差が統計的に有意となっている。

図7 青少年の野外教育の継続による日常生活への影響の特徴－宿泊ありの場合－

このように、宿泊なしの場合は、有意差がある項目は第I象限の「対自分自身の拡大」に偏っている。これは、わずか1回の参加でははっきりとした効果は出ないとしても、継続参加により特に自分自身についての認識の拡大にかかわる日常生活の変容を期待して

いる可能性がある。一方、宿泊ありの場合は、有意差がある項目はⅢ象限の「対自然・対他人の改善」に向かっていることから、継続参加により、特に自然や他人に対しての認識を改善させることを日常生活の変容に期待していると考えられる。

このような違いが生じるのは、今回の事例の場合、宿泊の有無により、野外教育の成果が日常生活に影響していく側面の違いによるものと考えられる。例えば、宿泊なしの場合はこれまで接したことのない新たな活動への挑戦などを繰り返すことにより、日常における自分自身の活動をこれまで以上に拡大させることに繋がり、また、宿泊ありの場合は自然環境における生活や共同生活を繰り返すことにより、これまでの考え方や行動の仕方を改善という意味で変えていくことに繋がるのではないかと推測される。この 2 面性は、青少年の野外教育の継続による日常生活への影響の特徴の 1 つと考えられ、あわせて青少年教育施設の受入事業として行われる野外教育の特徴の 1 つでもあることが予想される。但し、このことは事例となった青少年教育施設の運営方針等に依存することが推測されるため、今後その点も含めたさらなる検討を行わなければならない。

4. 今後の課題

今後の課題について、ここでは急ぎ取り組むべき 2 点に絞って述べておきたいと思う。その第 1 は、今回提示した特徴はあくまでも今回の事例に限る事実発見的なものに過ぎないため、今後さらなる事例研究を重ねつつ、特に今回は予想にとどまっていた継続参加による変容について追跡的に実態把握を行うことである。第 2 は、日常生活への影響と青少年の野外教育の目的達成のさらなる関係分析である。前回の研究作業で、青少年の野外教育の目的達成度による「参加 1 ヶ月後の変容」の有無の分析までは行ったが、今回新たに取り上げた「継続参加による変容予想」との関係分析までは触れることができなかった。これも今後の課題である。

注記

- 1) 拙稿「日常生活への影響からみた青少年の野外教育の目的達成の特徴」(『日本生涯教育学会論集』32, 平成 23 年, pp.103-112)。
- 2) 前掲論文 p.104 の第 1 図を修正。
- 3) 前掲論文 p.104 の第 2 図およびその説明を参照。野外教育による日常生活の変容については、対自然、対他者、自己の 3 つの側面にかかわる効果から言及しているものが多く、特に van der Smissen は、①自然との関係の認識の拡大・改善、②他人との関係の認識の拡大・改善、③自分自身との関係の認識の拡大・改善、を挙げている (van der Smissen, Betty 'The Dynamics of Research' van der Smissen, Betty (ed.) "Research Camping and Environmental Education (Penn State HPER Series No.11)" The Pennsylvania State University, 1975, pp.5-17 を参照)。第 2 図はこの考え方を手がかりに作成した。
- 4) 注 3)。なお、ここでいう拡大とは、知識量が増えることや物の見方が広がること、あるいは新たな活動を行うことなどで、改善とは、今まで身につけていた考え方や態度が変わったり、既に身につけていた行動の仕方が変わることなどである。
- 5) 調査の概要およびサンプルのプロフィールは付表 1 および付図 1 ～ 5 を参照。この

基礎集計結果については、白木賢信・太田正義・兵頭正行「静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果－2ヶ年調査結果の分析－」（社団法人日本キャンプ協会『キャンプ研究』第14巻第1号、平成22年、38-39頁所収）、同「静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(2)－3ヶ年調査結果の分析－」（社団法人日本キャンプ協会第15回日本キャンプ会議、静岡県立朝霧野外活動センター、平成23年9月23日）および白木賢信・太田正義・兵頭正行・櫻井良樹「静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3)－4ヶ年調査結果の分析－」（公益社団法人日本キャンプ協会第16回日本キャンプ会議、国立オリンピック記念青少年総合センター、平成24年5月26日）を参照。

付表1 調査の概要

1. 調査内容

- (1) 事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容
- (2) 繰り返し事業に参加することによって予想される変容
- (3) 各受入事業参加団体が設定した事業目的およびその達成度
- (4) 受入事業参加団体の種類
- (5) 受入事業団体の主たる年齢層
- (6) 受入事業期間（宿泊数）他

2. 調査対象・被調査者（サンプル）

平成20年度～平成22年度におけるセンター受入事業参加団体・左記受入事業参加団体担当者

3. 調査方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

- (1) センター担当職員が、各受入事業参加団体担当者に事業期間中に質問紙を配付
- (2) 各受入事業参加団体担当者は、事業実施後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答紙の質問紙をファックスにてセンターに返送

4. サンプルの回収状況

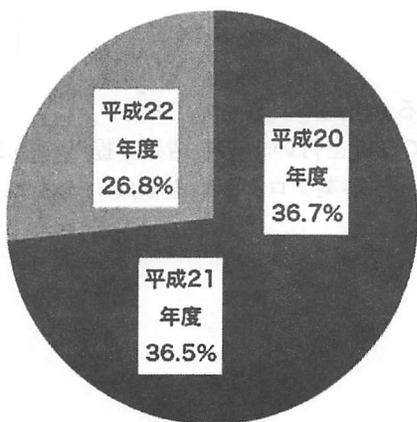
- (1) 回収数（率） 381（26.0%）
- (2) 有効回収数（率） 381（26.0%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成20年度～平成22年度におけるセンター受入事業参加団体数（のべ1,467団体）を母数としている。

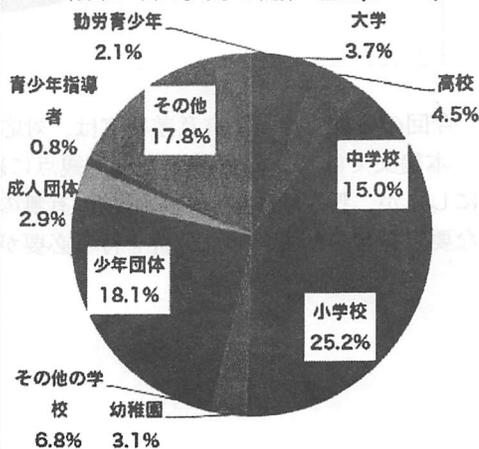
5. 調査実施期間

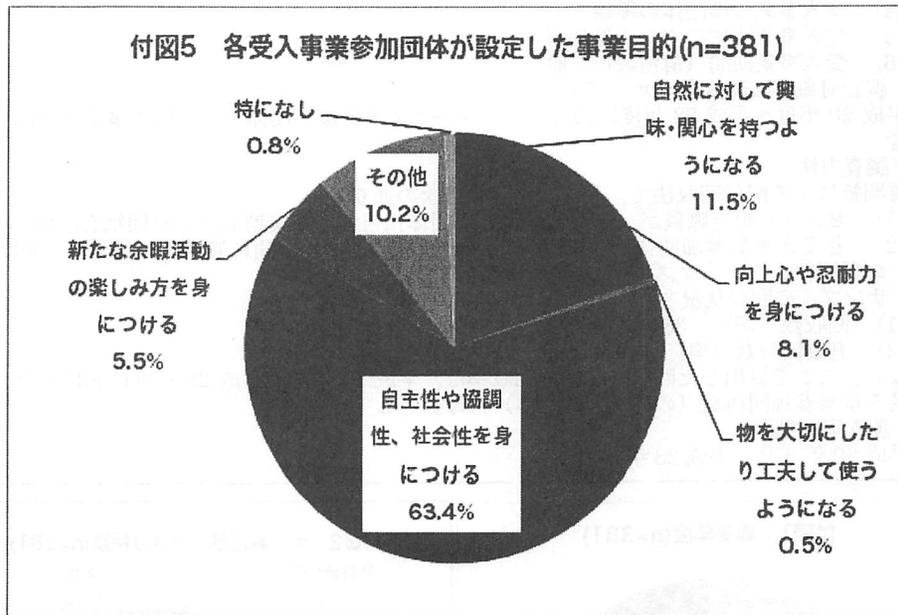
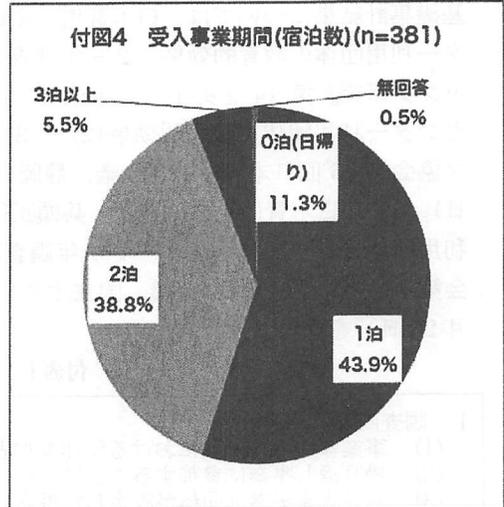
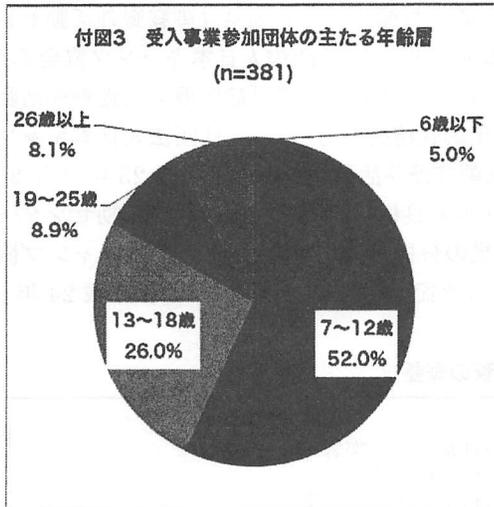
平成20年4月～平成23年3月

付図1 調査年度(n=381)



付図2 受入事業参加団体の種類(n=381)





- 6) 今回の分析で行った有意差検定は、対応のあるt検定によるものである。
- 7) 本論文では、この宿泊の有無に観点に絞って分析を行い、その結果を提示することにしたが、将来的には、この宿泊の有無のみならず事業プログラムを構成するさまざまな要素を含めた多角的な分析を行う必要がある。